

第 12 号(2009.06.06 配信)

今回は「昭和」の話の続き、後編のいわば戦後編です。

今「戦後」と言いましたが、年齢、年代により、「戦後」という言葉自体、その感覚、「戦後」を画する史実やイベントのとらえ方などが大きく異なるはずで、それを意識せざるを得ません。体験の違いだけでなく、「そんなこと知らなかった」とおっしゃるかもしれない。それらをあらかじめ承知して、誰も共通する「昭和史」のポイントを記していくつもりです。ご一読のうえ、ご自分の「昭和史」を振り返っていただきたいと思います。

昭和 20 年(1945)8 月 15 日に、戦争とその惨禍は取りあえず終わりを告げ、平和がよみがえりました。その後の 22～24 年に出生の方々は「団塊の世代」と呼ばれ、早や 65 歳も間ぢか。「高齢者」の入り口にやがて到達し、すでに定年でリタイアされた方もおいでです。この世代とその後お生まれのアラフィー、アラフォーとおっしゃる皆さんとは「戦後」の認識が違って当然。「団塊 2 世」から「戦後」って何？とお尋ねがあっても不思議とはいえません。昭和 20 年の「終戦の日」以降は、ずっと「戦後」に違いはない。けれども、その後の 44 年におよぶ昭和の後半を「戦後」と一口にお話するのは、どだい無理があります。この 40 余年を二つに区切りたいと考えますが、まずは戦争終結の時点から話を始めます。

国土は度重なる空爆で焦土と化し、東京の都心は焼け野原でした。農業も鉱工業も甚大なダメージを受けて荒廃し、個々人の生活はその日暮らし。占領軍の兵士や戦災孤児が都心に溢れる。そんな荒んだ惨状が戦後しばらく続きました。読者のごく一部、年配のみなさんしかご記憶に残っていないでしょう。

しかし、荒廃が延々と続くはずはありません。当時の壮年・青年の皆さんの不撓不屈の努力で、国土の復興が緒につき生産が再開します。日々の生活も食うや食わずの域から徐々に落ち着きを取り戻し始めました。けれども、敗戦国日本は、連合国からはもとより世界の動きから取り残されたままでした。

前編にならい、まず「戦後」の主な動きを年表風に拾ってみましょう。

昭和 21 年(1946) 天皇の人間宣言；新しい「日本国憲法」公布

昭和 23 年(1948) 極東国際軍事裁判終了；東条元首相ら 7 名処刑

昭和 26 年(1951) サンフランシスコ講和条約調印；日米安全保障条約調印(占領の終了)

昭和 29 年(1954) ビキニでの水爆実験で第五福竜丸被災

昭和 30 年(1955) 第 1 回原水爆禁止世界大会開催

昭和 31 年(1956)(旧)ソ連と国交回復；国際連合に加盟

昭和 35 年(1960) 日米安保条約改定で大闘争(岸内閣退陣 池田首相登場。「安保の年」と呼ばれ、また国際的には「アフリカの年」でもあった)

連合国の「占領」が米軍の「駐留」に変わって形式上は独立国となり、宿願の国連加盟がやっと実現しました。そこで「戦後」は終わりなのか。一つの区切りにはなっても、政府当事者ならともかく国民の実感、まだ「戦後」の続きだったのではないか？経済も生活も「戦後期」の混迷や窮乏から抜け切ってはいませんでしたから。

それよりも、上の記事を年代順に追ってみると、戦争が終わり平和が戻っても、何か騒然とした動きや先行きの不透明を感じ取れませんか？

日本の年表には記しませんが、昭和 24 年(1949)に「中華人民共和国」が成立し、翌 25 年(1950)には「朝鮮戦争」が勃発します。日本を取り巻く北東アジアは、まさに騒然状態が再現し、

日本も政治的、経済的に影響を受けています。「南北問題」というと、韓国と北朝鮮との関係と間違えられました。

「戦後」の話に戻します。昭和 31 年(1956)の『経済白書』が、日本経済の実態を述べて「もはや戦後ではない」と書いたのを覚えておいでの方は少なくないと思います。しかしこれも、いわば「お上」の主張で、「庶民」にとっては仕事も生活も「戦後」現象が終わり新しい時代が変わったという実感を味わったか、どうも疑問です。私たち自身の世代、友人たちの多くは、まだ学生かサラリーマンになり立ての頃です。もう「戦後」ではないぞと説教されているような、何か政治的・意図的な感じさえしたのですが...

つい先日、2016年五輪の招致運動に関連する論争の記事を読んでいると、フォークシンガーのなぎら健吾さんが、こう話していました。 - - 1956年に「もはや戦後ではない」と『白書』に書かれたけど、日本が世界に肩を並べるという意味では、「戦後」が終わったのは、64年(昭和39年)のあのオリンピックからだったと思います。新幹線も高速道路も通った。 - -

その数日後、やはり誘致運動関連で、NHKテレビが64年の東京五輪開催前を振り返り、フリージャーナリストの池上彰さんたちの現場検証と座談を交えた番組を放映しました。当時の東京の“大掃除”は大層な規模で、川の汚れや悪臭を無くそうと町の人々も出勤、小川の改修や蓋をして異臭を閉じ込める作戦を実行したのです。NHKの映像は、その様子を詳しく見せてくれました。余談ですが、今も歌われる「春の小川はさらさらいくよ」の「小川」ってどこの川を詠んだかご存知ですか？実は渋谷から恵比寿に流れている渋谷川。東京五輪前に暗渠に変えられた実話も、この番組で再認識できました。

新聞の記事とテレビの映像から、なるほど「東京五輪」は「戦後」の完了をだれもが実感できる大きい節目だったと痛感しました。当時、三波春夫さんが歌った「東京五輪音頭」の通り、世界中の国々から大勢の観客がやってくる。日本の選手も期待に応えた演技と勝利を連発しました。「戦後」一掃の、「復興・開花期」を象徴する大イベントでした。

なぎらさんが指摘のように、新幹線も高速道路も、オリンピックを契機に世銀の融資を受けて建設・開業したのでした。その借入金は、昭和を超えて、平成2年(1990)に完済できたことを付記しておきます。日本も「戦後」の復興に、国際社会から様々な支援を受けていたのです。

その後日本は、援助する国に転じます。「戦後」の言葉も昇華し、これから先20年は「発展・躍進期」と名づけましょう。途上国にむけて技術協力・資金協力が進みます。

昭和36年(1961) 旧OECE(海外経済協力基金。国際協力銀行の前身)設立
(円借款は33年に開始されていた)

昭和37年(1962) 外務省に経済協力局創設;旧OTCA(JICAの前身)設立

昭和39年(1964) OECD(経済協力開発機構)に加盟(“先進国クラブ”入り)

昭和40年(1965) 青年海外協力隊発足

これから先はみなさんよくご存知でしょうから、あえて記載を控えますが、参考までに追記すれば、昭和45年(1970)に大阪万博が開かれ、世界中に日本の現状が知れ渡りました。2年後の同47年(1972)には懸案だった日中国交回復が実現します。同53年(1978)には成田国際空港が開港し、同55年(1980)、自動車生産台数がアメリカを抜いて世界一に躍り出ました。

2回の連載になった「昭和の話」。「戦争の時代」から、「戦後」を克服し「復興・開花期」、そして「発展・躍進期」とほぼ20年づつを経過して「平成」に至りました。

苦難と悲惨な過去を忘れずに、不撓不屈の「復興と開花」を時に懐かしく思い起こし、「発展と躍進」を誇示、謳歌することなく、現代にその成果を受け継いで「昭和」を評価できる

ようにしたいと思います。

皆さんも、ぜひ、ご自分の「昭和」を描いてみてください。21年が経って「遠くなりけり」より前の今が、そのチャンスかもしれませんよ。

予想以上に長い話になりました。最後に新聞各紙に載った「昭和」から思い浮かぶ人物を、これも参考までに記しておきます。

1. 当然といえば当然ですが - - 「昭和天皇」
2. 功罪・善し悪しは別として - - 「田中角栄(元首相)」
3. 誰もが忘れ難い思い出をもつ - - 「美空ひばり」

政治家を思い浮かべる方が多い中で、スポーツ界の「長嶋茂雄」、俳優の「石原裕次郎」もお忘れなく。

思い起こす出来事は？ - - 太平洋戦争と 東京オリンピックとが双璧でした。

なお、前編で予報したオバマ政権との関連の話は、追って別に記すことにします。ご理解、ご容認ください。

(6月6日記。国際サブロー)